



TITLE:

『ハイジ』にみられるハイジの病
気

AUTHOR(S):

加茂, 映子

CITATION:

加茂, 映子. 『ハイジ』にみられるハイジの病気. 京都大学医療技術短期
大学部紀要. 別冊, 健康人間学 1988, 1: 48-51

ISSUE DATE:

1988

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/49479>

RIGHT:

『ハイジ』にみられるハイジの病気

加 茂 映 子

Heidi's illness in *Heidi*

Eiko KAMO

ABSTRACT: A newly-born baby is obliged to be put in the program which grownups have made, whether he or she likes it or not. They urge the baby to adjust to the world into which he or she has just come, by suckling, changing diapers and toilet training.

It is commonly assumed that children are imperfect, raw and lacking in many things, while grownups are perfect. Viewed from another angle, however, it may be said that a child still holds something primal and essential intact, which will be erased as he or she grows into adulthood, as William Wordsworth says, "The Child is father of the Man."

Considering this, it is quite natural that children occasionally fall ill in the course of growing old, which is a symptom of their disturbed self and also a rest period during which they can restore themselves again.

In *Heidi* by Johanna Spyri, Heidi, a girl freely brought up in a mountainous country is strongly contrasted to Clara, who is a daughter in a good family and has such a weak constitution that she has never been out of her house. Heidi brought fresh and pleasant air into this closed place, awakening Clara to it and later causing her to visit Heidi and her grandfather in their hut on the mountain. Moreover, by their eager help, Clara came to be able to stand on her own feet and walk after a long period in a wheelchair.

In this sense, Heidi is a kind of a curer. This report, however, focuses on the illness which Heidi herself suffered.

In the early part of this story, Heidi was taken from her home on the mountain to Frankfurt, or from nature to civilization. On the first morning in Frankfurt she got out of her bed to look out of the window, vainly expecting that she could see the same scenery as she had always seen in her home. Here, in the room assigned to her, surrounded only with walls under high windows, she felt

blockaded.

Meanwhile, mainly through Clara's grandmother, a kind and refined lady, she learned how to read and write, to restrain her willfulness and to be humble before God. As Heidi came to love and respect this old lady deeply, her longing for her home was unconsciously suppressed in the depth of her heart, but such a state of mind could not remain long. It caused her sleep-walking as well as the loss of a great deal of weight. Heidi was taken back home just before it was too late, and soon got over her illness.

In the latter part of this story, Heidi grew up to be a fine girl, so these experiences of hers in Frankfurt might prove not to have been serious, but rather, to have contributed to her maturing process. In spite of this, Heidi's illness suggests that education, when not right to the case, can distort a child's free development of his or her identity.

Key words: Nature, Education, Civilization

人は胎内から生まれ出るや否や、いや応なしに自立への道をたどらなければならない。一定の間隔をおいてなされる授乳やおむつの取り替えは、赤ん坊が日常性を身につけ社会に適応するための第一歩として大人が立てたプログラムの一項目である。一般に、大人は完成したものであり、子どもは未完成なものだという先入観があるので、子どもを幼稚だとか未熟だとか、あるいは子どもとは何かが不足している状態だとみなして、「這えば立て、立てば歩め」と、子どもにプログラムの実行を迫るのである。

子どもに対するこのような見方を変えて、逆に大人になってゆくにつれて色々な体験をしてゆくために抹消されてしまう人間の本質的な部分を、子どもはまだ損なわずに持っていると思なすこともできるのである。

英国の詩人ワーズワスは幼子おきなごの時に空にかかる虹を胸躍らせて見たことを思い出し、老いてもこの感受性を損なうことがないようにと祈った。そして子どもを‘The Child is father of the Man’(子どもは大人の父)と定義するのである。しかし人はみないや応なしに大人となり社会の一員となる。その過程において、持って生まれた人間の本質は徐々に損われてゆくのである。

北杜夫氏は『幽霊』(新潮文庫)の中で「幼年期というもののはただ育つこと大きくなることだけが目的なのだと言えるだろう、それならば、彼らが自らの成長にとって妨げとなるすべての体験、あらゆる記憶を、体内のどこかにじっと押し隠してしまうというようなことだってあるかもしれない」という¹⁾。

大人が子どもにたゆまぬ前進を強いる時、子どもに時たま訪れる「病気」は、必然的な現象でもあろう。「病気」は子どもが自分を建て直すのに是非とも必要な機会となるのであろう。その時子どもは、日常は押し隠していたあの本質的なものが、ひとときその覆いを剥がされて、本当の自分に戻れる、意味深いひとときを過ごしているのだといえよう。「病気」とは、ある意味で、日々成長を迫られている子どもが息をつける短い期間のことだといえよう。

スイス生まれの作家、ヨハンナ・シュピリ(Johanna Spyri)の作品『ハイジ』(Heidi, 1880, 81)において、子どもの「病気」とその「治癒」について考えたい。

『ハイジ』はアルムの山をはね回る野性の少女ハイジに対して、フランクフルトのお屋敷の娘クララを配置して、歩行困難で車椅子に頼り、

屋敷の外に出たこともなかった病身のクララが、ハイジがもたらした「自然」の風の心地よさに目覚め、ついにはアルムの山までもやって来て、そこで自分の足で歩けるようになる、自然児ハイジが治療者として大活躍をする物語であるが、本稿においてはこのハイジが罹った「病氣」に焦点を当てて考えたい。

両親に死なれた幼いハイジは、アルムの山の小屋に暮らしている父方の祖父、アルムおじさんの下に預けられる。山の中腹にはハイジと同じ年かさのペーターが、その母と盲目の祖母と住んでいる小屋がある。ハイジはペーターやペーターが番をしている山羊たちを友とし、おじさんから山の自然や暮らしについて学ぶ。その素直で率直な子どもらしさによって、かたくななおじさんの心を和らげ、ペーターの祖母を訪ねてやさしい言葉をかけて祖母を喜ばせる。このように周囲の人々を喜ばせたハイジもまた、自分がだれかに何かができることを知り、大きな喜びを得た。

しかし、成長期に向かいつつあるハイジに社会は手を触れずには置かない。「教育」はハイジを「自然」の中から「文明」の中へと連れ出す。ふもとの村の牧師がハイジを学校に通わせるように説得しにやってきたが、おじさんはハイジを学校へやるつもりはないと言った。しかし、やがてハイジはおじさんの下から引き離されて、遠くフランクフルトのお屋敷へ、屋敷の主人、ゼーゼマン氏のひとり娘で病気のクララのお相手をつとめ、かたがた、都会での教養を身につけるためということで、母方のおばデーデに連れ去られる。8歳の春のことであった。

石だたみが敷きつめられたフランクフルトに来て、壁に囲まれたお屋敷の中に住むことになったハイジは、アルムの山でのように戸外の樹が風に揺れる音や、朝に夕に山を紅に染める太陽の光を感じることなく、ペーターと共に山羊を追って山を駆けまわることもなくなった。ハイジの意識はひたすら内なる自己へ向かわざるを得ない。その結果、野性の少女ハイジの本

性は「病氣」という形をとることによって自己を守ろうとする。

ゼーゼマン家に着いた翌朝、自分にあてられた部屋のベッドでハイジは目が覚める。

ハイジは、ベッドからとびおいて、したくをしました。それから、あちらの窓、こちらの窓と、ゆきました。空を見、大地を見たくてたまりませんでした。この大きなカーテンにつつまれた部屋にいと、なんだか自分が、かごの中にはいっているような気がしました。しかし、カーテンをどけることは、できませんでした。その中にもぐりこみ、窓から外をのぞこうとしました。ところが、窓はたいへん高く、やっとハイジのあたまたに、すれすれなくらいで、外を見ることはできませんでした。見たいと思ったものが、なにも見られず、一つの窓からべつの窓を走っているうちに、とうとう、最初の窓へもどりました。けれども、目の前にあるのは、いつも同じものばかりでした。かべと窓と、それから、またかべと窓でした²⁾。

それでもハイジは、窓さえ開けば下には大地と、緑の草と、山の勾配の、とけかかっている雪とが見えるにちがいないと思いこみ、それが見たくてたまらなかった。このような環境の激しい変化にもかかわらず、ハイジは新しい生活に次第になじんでゆくように思われる。病身の令嬢クララとすぐに仲良くなり、ふたりはこっけいなまでに上品ぶったロッテンマイア女史を馬鹿にして、悪ふざけをして楽しむ。だが、ハイジの健康に致命的な影響を与えたのは、「教育」の体現者であるゼーゼマン老夫人である。

クララの祖母、ゼーゼマン老夫人がハイジに施した「教育」のひとつは、ハイジに読み書きの力を目覚めさせたことである。本を読むことができるようになったハイジの世界は広がり、老夫人からもらった本はハイジの宝物となった。この喜びは老夫人への深い敬愛の気持をハイジに抱かせた。

老夫人の施した「教育」のふたつ目はハイジ

に神に祈ることを教えたことである。その結果、ハイジはまず、「山のおじいさんのところへ帰らせて下さい」と一心に祈った。その間にもハイジはやせて顔色が悪くなってゆき、ハイジの心のかげりに気づいた老夫人はハイジに、神様は人間が祈ればすぐに願いをききとどけて下さるというのではなく、もっと大きな心で人間を包み愛して下さる存在であること、人間もそのような神様に応えるようにひたすらいのり、つつましい気持で耐えるならば、ついにはよりよい状態に到ることができるのだ、と諭した。

今は老夫人を深く信じるようになっていたハイジは、この言葉をしっかりと胸に染み込ませようとしたが、それはハイジの胸の奥底からつき上げてくる願い―山へ帰りた―を押さえつけただけでなく、そもそも、そのような願いを抱くことは罪深い人間のすることだという思いを抱かせたのであった。その結果、ハイジは夢遊病になりお屋敷の内外を歩きまわり、夜中に白いものをまとったお化けが出るとか、毎朝玄関の扉が開け放したとか、屋敷中の人々を恐怖に陥れたのである。取り返しがつかなくなるほど病気が悪化する一歩手前で、クララの家庭医クラッセン氏はハイジを山に帰らせた。そこにはなつかしいおじいさんやペーターの祖母がいた。以前と変らない山の風や光があった。ハイ

ジの心はふたたび開かれて、ハイジは生き生きとした自分を取り戻した。

ゼーゼマン夫人の教えは、砂に染み通る水のように、純真なハイジの心に染み通った。非のうちどころがないと思われるこの教えは育ちゆく芽を伸ばすよりもむしろ、その成長をゆがめる結果となった。とはいえ、ハイジがフランクフルトで受けた「教育」がハイジの健康と幸福に寄与しなかったというのではない。

ハイジがアルムの山に帰り、健康を取り戻したところでこの物語を終えようと、いったん筆を置いた作者シュピリはその後さらに書き続けて、クララをはじめとするフランクフルトの人々が山へハイジとおじいさんを訪ね、クララもまた健康を回復し、両親のないハイジにはクラッセン医師が後見人になったところでこの物語を終えている。ハイジの持って生まれた本質が損われることなく、教養によってより人間的なものに磨かれてゆくであろうことをねがって、この小論の結びとする。

文 献

- 1) 『幽霊』北杜夫、新潮文庫、48頁、昭和40年。
- 2) 『ハイジ』ヨハンナ・スピリ作、竹山道雄訳、岩波少年文庫、上巻、153頁、1952。